

## 木曾駒ヶ岳における植生復元作業について（10年間の取組み）

中部森林管理局 木曾森林ふれあい推進センター

自然再生指導官 小林 伸雄

東京コンサルタンツ株式会社 環境推進グループ係長 藤田 淳一

### 1 課題を取り上げた背景

中央アルプス木曾駒ヶ岳周辺においては、登山者による踏み荒らしや、大量の降雨・降雪による砂礫の移動等により高山植物の生育地が荒廃し、貴重な高山植物の衰退が懸念されていることから、植生マット敷設による植生復元作業とそのモニタリング調査を実施しています。

### 2 取組の経過

- ① 植生復元作業は、平成16年度に植生荒廃の著しい登山道周辺を中心とする区域において、植生の現況等を明らかにし、荒廃した植生の復元を図るため、検討会を立上げ植生の復元や維持管理等について検討を行い方針を立てました。その結果平成17年度から



植生マット敷設作業

- ボランティアや地元関係者の協力を得ながら植生マットを敷設し、マットの下に種を蒔くといった一連の作業を実施して来ました。
- ② モニタリング調査は、植生マット敷設箇所において、1m×1m四方を基本として植生の分布状況に応じた大きさの固定プロットを設置し、方眼紙を用いて種名、株の形や大きさ、位置、目印となる礫等をスケッチしたプロット図を作成し、被度（%）、草丈（cm）個体数等を記録しました。

### 3 実行結果

- ① 植生復元作業において、この10年間のボランティア等による植生マットの敷設面積は1,967㎡、参加人員は述べ334人となりました。
- ② モニタリング調査の結果、植生復元作業を実施した箇所では全体として植生は順調に回復していました。環境が比較的安定した風背地ではもちろんのこと常に強風にさらされる風衝地においても順調な回復をみせています。



モニタリング調査

植生回復の傾向として、マット敷設後数年は、ほとんど植生が発達しない状態が続き、高山植物の実生（芽生え）が進入と消失を繰り返していました。敷設後、4～5年程度経過すると定着した実生が大きく生長してきました。

これまでのモニタリングの結果、事例の少ない高山帯における植生回復初期の様子を記録として残すことができ、長い目でモニタリングすることの重要性も明らかになりました。

### 4 考察

長期間に渡るモニタリングの結果から、風衝地、風背地といった立地により植生回復の速度は異なるものの、植生復元作業により人による踏み込みがなくなるだけで着実な植生回復をみせることがわかりました。逆に地表を水が流れる場所のように表土が移動する場所や、冬季に凍上する場所では、植生回復は難しく、表土の状態を整える必要があることが考えられました。